

研究ノート

妊・産・褥婦の妊娠・出産・育児に関して 気になること、困ったことの実態

——妊娠から新生児期までの教材開発にむけての基礎調査——

早川有子¹⁾・小林和成¹⁾・トルマ千恵¹⁾
横田佳昌²⁾・横田英巳²⁾・大野絢子¹⁾

Study about concerns of expectant mothers related to perinatal and postpartum care of fetus and infant.

——Research towards developing teaching materials for pre and postpartum care——

Yuko HAYAKAWA¹⁾, Kazunari KOBAYASHI¹⁾, Chie TORUMA¹⁾
Yoshimasa YOKOTA²⁾, Hidemi YOKOTA²⁾, Ayako OHNO¹⁾

キーワード：教材開発、母性看護、妊・産・褥婦、新生児、不安

I. はじめに

2007年(平成19年)現在、我が国の出生率は8.6、合計特殊出生率は1.34と低迷し続けている¹⁾。また、高学歴社会や女性の社会進出に伴う晩婚化をはじめ、都市化・核家族化が進行している。このような社会状況の中、地域との関係が希薄になり、身近には気軽に相談できる人がいない等による育児不安が指摘されている。そして、患者が欲しい情報(あふれる情報・時には誤った情報)が簡単にインターネット等から得られる時代になり、妊娠や出産に関する情報の氾濫を招いていることが考えられる。さらに、産科医療を取り巻く環境の劣悪化、或いは人員不足等により、妊・産・褥婦の保健指導等に十分対応できない現状がある。このような社会情勢の中で、一人の女性が安心して妊娠、出産、育児を行うためには、早急に社会的な支援システムを整え、医療機関やスタッフの知識や技術の向上を図る必要があると考える。

様々な職場を通して、妊娠、出産、育児に関する医療機関や医療従事者の間で、知識や技術の力の偏りを感じる機会が少なくない。その中でも、妊娠、出産、育児の真っ直中にある対象においては、日々の何気ない出来事や症状等に一喜一憂する状態であり、現在の

世の中での妊娠や育児生活は想像以上に負担が大きく、不安な日々を送っていることが考えられる。

これらのことから、妊・産・褥婦のニーズを把握した上で、安全で適切なケアを提供できる医療機関の整備やスタッフの育成が急務である。現状では、各医療機関及び教育機関において、各々の教育や研修プログラムのもと知識や技術の習得、スキルアップを目的とした試みが行われているが、職種や経験年数を超えて共有できる教材は用いられていない。特に、妊・産・褥婦本人やその家族が、医療専門職と同一の認識のもと妊娠、出産、産褥、育児に関する医学的な所見やケアのポイントを共有できる教材は見当たらない。

そこで、医師や助産師、看護師が職種や経験年数の壁を超えて同一の見解のもと業務にあたり、妊・産・褥婦やその家族も医療職と同一の認識のもと健康管理や出産に臨み、お互いの立場の力を発揮し、妊娠、出産、産褥、育児に関わるケアの質の向上、さらには充実した妊娠や育児生活を実現させるための教材開発をすることを研究の目的とした。今回は教材開発に向けての最初の取り組みとして、妊産婦の妊娠・出産・育児に関して気になること、困ったことの実態を明らかにすることとする。

1) 群馬パース大学保健科学部看護学科 2) 横田マタニティホスピタル

II. 方 法

1. 対象：群馬県（中毛地区）のA病院で同意を得られた外来受診時（妊婦健診・1か月健診）及び入院中の妊・産・褥婦である。
2. 調査方法：無記名による自記式質問紙による調査。以下の内容について「気になること／困ったこと」の意見を求めた。調査対象者には、文書を用い研究目的・方法の説明を行い、調査への協力は任意とした。調査に同意した場合のみ質問紙を回収箱に投函してもらった。
3. 調査内容：

質問紙の調査項目を作成するのにあたり、予備調査として妊・産・褥婦の「妊娠・出産・育児に関し気になること、困ったこと」の実態を把握するために自由記述式による質問調査を行い、自由記述の文章からの確に問題点あげている意見を抽出し、アンケート用紙を開発（プレテストを数回行い修正・作成）した。

 - 1) 対象の属性：年齢、妊娠中・出産後の別、妊娠週数・出産後日数、出産経験
 - 2) 妊娠に関すること：妊娠中の身体、身体変化、日常生活、胎児への影響、栄養、家族、届出
 - 3) 出産に関すること：お産の進行、お産時の処置、お産時の身体、届出
 - 4) 産後に関すること：出産後の身体変化、日常生活、授乳
 - 5) 育児に関すること：育児、新生児の特徴、病気、検査
 - 6) その他：自由記述
4. 分析方法：各調査項目の基本統計量を算出し、対象の属性毎に妊娠・出産・産後・育児の各期における意識の比較を χ^2 検定にて行った。
5. 調査期間：平成20年9月—平成21年1月。
6. 倫理的配慮：研究主旨、方法、プライバシーの保護について明記した説明書をもとに研究依頼をした。プライバシーの配慮として、質問紙は無記名とし、回収箱に直接質問紙を投函してもらう方法で回収した。記載された内容は、個人が特定できないように処理し調査以外には使用しないこと、結果の公表についても申し添えた。

III. 結 果

1. 対象の基本属性

264人から回答が得られ、そのうち無効回答を除いた262人を分析の対象とした（有効回答率99.2%）。年齢は、「30歳台」が146人（55.7%）と最も多く、平均30.9±4.7歳（最小19歳、最大44歳）であった。妊娠・出産の別では、妊娠中が186人（71.0%）、出産後が61人（23.3%）で、妊娠週数は平均22.9±13.1週、産後日数は平均15.2±49.7日であった。出産経験は、「初産」が146人（55.7%）と多く、平均1.5±0.7回であった（表1）。

表1 対象の基本属性 n = 262

年齢	平均値±標準偏差 <最小—最大>	人数(%)
	30.9±4.7歳 <19—44>	
10歳代		2 (0.8)
20歳代		93 (35.5)
30歳代		146 (55.7)
40歳代		7 (2.7)
不明		14 (5.3)
現在の状況	妊娠中	186 (71.0)
	出産後	61 (23.3)
	不明	15 (5.7)
妊娠週数	平均値±標準偏差	22.9±13.1週
産後日数	平均値±標準偏差	15.2±49.7日
出産経験	平均値±標準偏差 <最小—最大>	1.5±0.7回 <1—4>
	初産	146 (55.7)
	2子目	83 (31.7)
	3子目	16 (6.1)
	4子目	3 (1.1)
	不明	14 (5.3)

2. 妊娠に関すること

妊娠中の身体では「貧血」52人（19.8%）が最も多く、以下「アレルギー」48人（18.3%）、「妊娠高血圧症候群」35人（13.4%）「定期健康診査」35人（13.4%）の順であった（表2—1）。身体変化では「つわり」89人（34.0%）が最も多く、以下「便秘・痔核」88人（33.6%）、「腰痛」81人（30.9%）の順であった（表2—2）。日常生活では「運動」69人（26.3%）が最も多く、以下「運転・旅行」57人（21.8%）、「睡眠・休息」56人（21.4%）の順であった（表2—3）。胎児への影響では「薬剤」72人（27.5%）が最も多く、以下「嗜好品」52人（19.8%）、「母体感染症」24人（9.2%）の順であった（表2—4）。栄養では「体重管理」128人（48.9%）が最も多く、以下「必要な栄養素」106人

表2 妊娠に関することで気になること／困ったこと

n = 262

項目	人数	%
表2-1 妊娠中の身体に関すること		
1. 貧血	52	19.8
2. アレルギー（アトピー・食物など）	48	18.3
3. 妊娠高血圧症候群	35	13.4
3. 定期健康診査（血圧・尿・超音波・NST検査など）	35	13.4
5. 年齢（若年・高年）	32	12.2
6. 骨盤位矯正法	14	5.3
7. 多胎妊娠（双胎・品胎）	1	0.4
8. その他	16	6.1
9. 特になし	85	32.4
表2-2 身体変化に関すること		
1. つわり	89	34.0
2. 便秘・痔核	88	33.6
3. 腰痛	81	30.9
4. 妊娠線	70	26.7
5. 頻尿・尿漏れ	59	22.5
6. 浮腫・むくみ	49	18.7
7. 乳房ケア	47	17.9
8. 静脈瘤	13	5.0
9. 下肢の痙攣	12	4.6
10. 四肢のしびれ	8	3.1
11. その他	14	5.3
12. 特になし	25	9.5
表2-3 日常生活に関すること		
1. 運動（妊婦体操・ヨガ・水泳など）	69	26.3
2. 運転・旅行	57	21.8
3. 睡眠・休息	56	21.4
4. 口腔衛生・虫歯の治療	38	14.5
5. パーマ・ヘアカラー	31	11.8
6. 衣服・靴・腹帯	26	9.9
7. 性生活	17	6.5
8. 排泄	13	5.0
9. その他	3	1.1
10. 特になし	75	28.6
表2-4 胎児への影響に関すること		
1. 薬剤（常備薬など）	72	27.5
2. 嗜好品（タバコ・アルコールなど）	52	19.8
3. 母体感染症（GBS・クラミジアなど）	24	9.2
4. 放射線被曝	22	8.4
5. 羊水検査	21	8.0
6. 出産前診断	18	6.9
7. 血液型不適合妊娠	3	1.1
8. その他	17	6.5
9. 特になし	82	31.3
表2-5 栄養に関すること		
1. 体重管理	128	48.9
2. 必要な栄養素（葉酸・鉄など）	106	40.5
3. 食事摂取量	69	26.3
4. その他	0	0.0
5. 特になし	8	3.1
表2-6 家族に関すること		
1. 上の子どもとの関わり	48	18.3
2. 夫・家族との関わり	30	11.5
3. 里帰り分娩	17	6.5
4. その他	5	1.9
5. 特になし	150	57.3
表2-7 届出に関すること		
1. 妊娠・出産に関する法律	38	14.5
2. 母子健康手帳	10	3.8
2. 妊娠届出	10	3.8
4. その他	3	1.1
5. 特になし	171	65.3

（40.5%）、「食事摂取量」69人（26.3%）の順であった（表2-5）。家族では「上の子どもとの関わり」48人（18.3%）が最も多く、以下「夫・家族の関わり」30人（11.5%）、「里帰り分娩」17人（6.5%）の順であった（表2-6）。届出では「妊娠・出産に関する法律」38人（14.5%）が最も多く、以下「母子健康手帳」10人（3.8%）、「妊娠届出」10人（3.8%）の順であった（表2-7）。

3. 出産に関すること

お産の進行では「お産の始まり」100人（38.2%）が最も多く、以下「産痛緩和」55人（21.0%）、「破水」49人（18.7%）、「陣痛の変化」49人（18.7%）の順であった（表3-1）。お産時の処置では「会陰切開・会陰縫合」83人（31.7%）が最も多く、以下「輸液」27人（10.3%）、「浣腸・導尿」22人（8.4%）の順であった（表3-2）。お産時の身体では「食事・水分摂取」および「体位・動作」52人（19.8%）が各々最も多かった（表3-3）。届出では「出産手当・一時金」63人（24.0%）が最も多く、以下「出生届」35人（13.4%）、「出生証明書」25人（9.5%）の順であった（表3-4）。

表3 お産に関することで気になること／困ったこと

n = 262

項目	人数	%
表3-1 お産の進行に関すること		
1. お産の始まり（産微・陣痛の始まり）	100	38.2
2. 産痛緩和（呼吸法・体位など）	55	21.0
3. 破水	49	18.7
3. 陣痛の変化	49	18.7
5. 入院の時期・持ち物	44	16.8
6. 無痛・和痛分娩	42	16.0
7. 帝王切開	25	9.5
8. その他	3	1.1
9. 特になし	57	21.8
表3-2 お産時の処置に関すること		
1. 会陰切開・会陰縫合	83	31.7
2. 輸液（誘発分娩含む）	27	10.3
3. 浣腸・導尿	22	8.4
4. 分娩監視装置	13	5.0
5. 人工破膜	8	3.1
6. その他	4	1.5
7. 特になし	110	42.0
表3-3 お産時の身体に関すること		
1. 食事・水分摂取	52	19.8
1. 体位・動作	52	19.8
3. 睡眠・休息	44	16.8
4. その他	4	1.5
5. 特になし	118	45.0
表3-4 届出に関すること		
1. 出産手当・一時金	63	24.0
2. 出生届	35	13.4
3. 出生証明書	25	9.5
4. その他	0	0.0
5. 特になし	143	54.6

4. 産後に関すること

出産後の身体変化では「傷の痛み」83人(31.7%)が最も多く、以下「子宮収縮」79人(30.2%)、「乳房」64人(24.4%)の順であった(表4-1)。日常生活では「運動」63人(24.0%)が最も多く、以下「清潔」48人(18.3%)、「食事・水分」35人(13.4%)の順であった(表4-2)。授乳では「授乳方法」74人(28.2%)が最も多く、以下「母乳と人工乳」69人(26.3%)、「授乳中の薬剤」55人(21.0%)の順であった(表4-3)。

表4 出産後に関することで気になること/困ったこと
n=262

項目	人数	%
表4-1 出産後の身体の変化に関すること		
1. 傷(会陰)の痛み	83	31.7
2. 子宮収縮(産後の腹痛)	79	30.2
3. 乳房(張り・乳腺炎など)	64	24.4
4. 悪露の変化	58	22.1
5. 痔核・脱肛の手入れ	50	19.1
6. その他	8	3.1
7. 特になし	62	23.7
表4-2 日常生活に関すること		
1. 運動(産褥体操など)	63	24.0
2. 清潔(シャワー・入浴など)	48	18.3
3. 食事・水分	35	13.4
4. 子宮脱・尿失禁・便失禁	23	8.8
5. 職場への復帰・就職	22	8.4
6. 嗜好品(タバコ・アルコールなど)	20	7.6
7. 産後の避妊法	14	5.3
8. 排泄の調整	11	4.2
9. 家族計画	7	2.7
10. その他	3	1.1
11. 特になし	85	32.4
表4-3 授乳に関すること		
1. 授乳方法	74	28.2
2. 母乳と人工乳	69	26.3
3. 授乳中の薬剤	55	21.0
4. その他	11	4.2
5. 特になし	79	30.2

5. 育児に関すること

育児では「哺乳量」82人(31.3%)が最も多く、以下「保育環境」55人(21.0%)、「体重増加・減少」53人(20.2%)の順であった(表5-1)。新生児の特徴では「夜泣き」61人(23.3%)が最も多く、以下「便の変化」34人(13.0%)、「頭血腫・産瘤」21人(8.0%)の順であった(表5-2)。病気では「黄疸」56人(21.4%)が最も多く、以下「ビタミンK欠乏性新生児出血症」28人(10.7%)、「腕神経叢麻痺」21人(8.0%)の順であった(表5-3)。検査では「先天性代謝異常検査」50人(19.1%)が最も多く、以下「黄疸検査」38人(14.5%)、「聴覚検査」37人(14.1%)、「血液検査」37人(14.1%)の順であった(表5-4)。

表5 新生児に関することで気になること/困ったこと
n=262

項目	人数	%
表5-1 育児に関すること		
1. 哺乳量	82	31.3
2. 保育環境(室温・湿度など)	55	21.0
3. 体重増加・減少	53	20.2
4. 排泄(尿・便)	44	16.8
5. お風呂の入れ方	41	15.6
6. 嘔吐	35	13.4
7. 予防接種	34	13.0
8. オムツかぶれ	33	12.6
8. 赤ちゃんにきび(脂漏性湿疹)	33	12.6
10. 体温・呼吸	32	12.2
11. 睡眠	30	11.5
12. 衣服・寝具	29	11.1
13. へそ(臍肉芽腫など)	25	9.5
14. その他	6	2.3
15. 特になし	70	26.7
表5-2 新生児の特徴に関すること		
1. 夜泣き	61	23.3
2. 便の変化	34	13.0
3. 頭血腫・産瘤	21	8.0
4. 新生児月経	19	7.3
4. 赤っぽい尿(レンガ尿)	19	7.3
6. 目やに(眼脂)	18	6.9
7. 乳房肥大・魔乳	14	5.3
8. その他	4	1.5
9. 特になし	109	41.6
表5-3 病気に関すること		
1. 黄疸(光線療法)	56	21.4
2. ビタミンK欠乏性新生児出血症	28	10.7
3. 腕神経叢麻痺	21	8.0
4. 内反足・外反足	20	7.6
5. 結膜炎	19	7.3
5. 鎖骨骨折	19	7.3
7. 臍ヘルニア	18	6.9
7. 舌小帯短縮症	18	6.9
7. ソケイヘルニア	18	6.9
10. 耳変形・副耳	17	6.5
10. 陰のう水腫	17	6.5
12. その他	15	5.7
13. 特になし	113	43.1
表5-4 検査に関すること		
1. 先天性代謝異常検査(ガスリー検査)	50	19.1
2. 黄疸検査(ビリルビン検査)	38	14.5
3. 聴覚検査	37	14.1
3. 血液検査	37	14.1
5. その他	6	2.3
6. 特になし	123	46.9

6. 対象の基本属性別にみた妊娠・出産・産後・育児各期の意識

対象の年代別、妊娠中・出産後別、出産経験別で「気になること」「困ったこと」をみると、対象の年代毎の比較(30歳以上群・30歳未満群)では、30歳以上群で、「年齢(若年・高年)」「四肢のしびれ」、30歳未満群で「妊娠線」「妊娠届出」「お産の始まり(産徴・陣痛の始まり)」「破水」「体位・動作」「授乳方法」「お風呂の入れ方」「衣服・寝具」「血液検査」を選択する者の割合が有意に多かった($P < 0.05$)。

妊娠中・出産後の別では、妊娠中群で「年齢（若年・老年）」、「出産後群で「お産の始まり（産徴・陣痛の始まり）」、「分娩監視装置」「傷（会陰）の痛み」「哺乳量」「体温・呼吸」「排泄（尿・便）」「嘔吐」「赤ちゃんにきび（脂漏性湿疹）」「新生児月経」「便の変化」「結膜炎」「血液検査」を選択する者の割合が有意に多かった（ $P < 0.05$ ）。

出産経験別では、初産婦で、「定期健康診査（血圧・尿・超音波・NST 検査など）」「妊娠高血圧症候群」「乳房ケア」「運動（妊婦体操・ヨガ・水泳など）」「嗜好品（タバコ・アルコールなど）」「食事摂取量」「必要な栄養素（葉酸・鉄など）」「妊娠・出産に関する法律」「お産の始まり（産徴・陣痛の始まり）」「陣痛の変化」「入院の時期・持ち物」「破水」「産痛緩和（呼吸法・体位など）」「会陰切開・会陰縫合」「食事・水分摂取」「体位・動作」「出生証明書」「出生届」「出産手当・一時金

「傷（会陰）の痛み」「食事・水分」「授乳方法」「母乳と人工乳」「哺乳量」「体温・呼吸」「排泄（尿・便）」「お風呂の入れ方」「衣服・寝具」「保育環境（室温・湿度など）」「オムツかぶれ」「予防接種」「赤っぽい尿（レンガ尿）」「頭血腫・産瘤」「便の変化」「夜泣き」「ビタミンK欠乏性新生児出血症」「鎖骨骨折」「腕神経叢麻痺」「結膜炎」「陰のう水腫」「先天性代謝異常検査（ガスリー検査）」「聴覚検査」等、経産婦は「上の子どもとの関わり」を選択する者の割合が有意に多かった（ $P < 0.05$ ）。

7. 妊・産・褥婦の妊娠・出産・育児に関してきになること、困ったこと（意見・要望の自由回答一部抜粋）

妊婦・出産・産後・新生児に関する生の声を表6に示した。

表6 妊・産・褥婦の妊娠・出産・育児に関して気になること／困ったこと（意見・要望の自由回答一部抜粋）

〈妊婦に関する生の声〉

- ・ 出産前より痔になり薬を使用、産後もさらに悪化するのではないかと心配。
- ・ 痔の場合、薬局で売っている一般の薬を使用してよいのでしょうか？
- ・ もともと痔なのですが、第1子出産でひどくなったので、第2子が心配。
- ・ 顔にシミやそばかすが増加し、脇の下が黒ずんでしまったが、産後回復するでしょうか？
- ・ 妊娠初期問題ない歯が急に9カ月に入り 痛みだした、妊娠後期歯の治療は大丈夫でしょうか？
- ・ 全身に8カ月頃から痒みと湿疹がでてしまい、夜間眠れなかつたり痒みのストレスがとても強かった。
- ・ 10カ月に入ってもつわりがあるが大丈夫か？
- ・ 妊娠線のかゆみが強いのですが、自宅でするケアがありますか？
- ・ 坐骨神経痛が辛い時期があったんですが、治療・緩和することができたでしょうか？
- ・ 2回目のほうが腰痛や頻尿、時々尿もれ等の変化が大きい。
- ・ 便秘がとてもひどく、食後散歩等をしているのですがなおりません。薬もきかないので大変です。

〈出産に関する生の声〉

- ・ いつはじまるかわからないので不安だった。
- ・ 初回初めての夜中のお産で陣痛がおさまると眠気がおそってきて体力的に辛かった。
- ・ どのタイミングで病院に電話をしたらよいのか。どうなったら陣痛なのかわからなくて迷った。
- ・ 会陰切開はできればしたくありません、必ず必要なのでしょうか？
- ・ 破水した時、どのような対処をしたらいいですか？

〈産後に関する生の声〉

- ・ 乳腺炎になった人はまたなりやすいでしょうか。
- ・ 授乳中に母親がインフルエンザの注射をしてもよいのでしょうか。
- ・ 排便でいきむ時、傷がさけないか心配です。
- ・ 2人目の方が子宮収縮の傷みがつ強いというが、どうしてですか？

〈新生児に関する生の声〉

- ・ 赤ちゃんが吸にくい乳首なので上手に吸ってもらえるか心配、またでるか心配です。
- ・ まだまったく母乳がでず大丈夫か心配です。
- ・ 室内犬を飼っているのが心配です。
- ・ 誕生後、赤ちゃんに起こりうる体の異常、変化など特徴的なものがあれば教えてもらえば不安が軽減される。

IV. 考 察

本研究の目的は、母親・医療スタッフが共有できる教材作成をするための基礎資料を得ることである。そして、今回は、目的である妊娠から新生児期までの「気になること」「困ったこと」についてのニーズをアンケート調査にて把握した。調査を依頼した病院では、妊娠前期に「妊娠中の過ごし方」「運動」「食事・栄養」など、妊娠後期には「お産に関すること」「入院の時期」「会陰切開」「無痛分娩」などについて、両親学級を実施している。しかし、今回のアンケート調査の結果をみると、妊娠中に関することで30%以上の妊婦が「気になること」「困ったこと」であげたのは、「体重管理」48.9%、「必要な栄養素」40.5%、「つわり」34.0%、「便秘・痔核」33.6%、「腰痛」30.9%であった。また、妊婦の生の声では、痔についてみると「出産前より痔になり薬を使用、産後もさらに悪化するのではないかと心配」「痔の場合、薬局で売っている一般の薬を使用してよいのでしょうか」「もともと痔なのですが、第1子出産でひどくなったので、第2子が心配」等切実な妊婦の訴えであった。この結果から妊婦のニーズは各々違い、妊娠中の指導で予防・解決できるものが多く、これらの不安を解決するためには両親学級の受講だけでは難しく、妊・産・褥婦のニーズにあわせた個別的・具体的な指導を展開していく必要があると思われる。中林は²⁾助産師外来は健診時間にゆとりがあり、日常的な疑問・不安について気軽に相談できるので不安の解消に有効であり、妊婦の満足が高いことを述べている。このように気軽にいつでも質問・相談できる助産師外来を取り入れることは不安の軽減に有効であると思われる。これが不足している産科医による外来業務が軽減されることに繋がり、病棟や分娩等の仕事に力を注ぐことが可能となるのではないだろうか。

出産に関することで30%以上の産婦が「気になること」「困ったこと」であげたのは、「お産のはじまり」38.2%であった。また、出産に関する生の声では、「いつ始まるかわからないので不安だった」「初回初めて夜中のお産で陣痛がおさまると眠気がおそってきて体力的に辛かった」「どのタイミングで病院に電話をしたらよいのか」など、分娩の緊迫した状況をどう乗り切ったらよいかという切実なものであった。堀内は³⁾女性の出産体験は、もう懲り懲りという辛い体験、時には外傷体験となってしまう人から、またすぐに生みたくなるような非常に心地よい快体験、人生観が180度転換

する体験になる方まで様々であると述べている。このような分娩という大切な時期を少しでも心地よい快体験にするために、医療者側の的確な判断力とスキル及び最適な看護を限られた時間内に提供するためのマニュアル作りが必要であると思われた。

産後に関することで30%以上の人々が「気になること」「困ったこと」であげたのは、「傷の痛み」31.7%、「子宮収縮」30.2%であり痛みに対して不安が多いことがわかった。また、産後に関する生の声では「乳腺炎になった人はまたなりやすいでしょうか」「授乳中に母親がインフルエンザの注射をしてもよいのでしょうか」「排便でいきむ時、傷がさけないか心配です」等であった。新生児に関することで30%以上の人々が「気になること」「困ったこと」であげたのは、「哺乳量」31.3%であった。また、新生児に関する生の声では、「赤ちゃんが吸いにくい乳首なので上手に吸ってもらえるか心配」「まったく母乳がでず大丈夫か心配」「誕生後、赤ちゃんに起こりうる体の異常、変化など特徴的なものがあれば教えてもらえば不安が軽減される」などであった。これらのことから妊・産・褥婦が科学的根拠に基づいたケアと指導及び教材を求めていることが伺えた。

現在、医療関係者が各々の立場で母親に指導するため、知識レベルによって大きく指導内容が異なる。また、医療スタッフが忙しく母親のニーズに十分対応することができない現状にある。これらのことより、母親は迷い指導内容に満足できない状況を抱え退院することもある。宮里は⁴⁾行政と大学が協働する助産師活動と題して2008年3月世田谷区と武蔵大学の協力により、産後の母子を対象とした育児支援センターが開設したことを報告している。これは、出産を予定している、あるいは出産をした人全ての家庭を対象とし、支援が必要な家庭を適切に見極め、地域関係機関との連携をとることを目的とした支援を展開している。退院後、このような母子支援センターを病院の一部に開設することも大切であると考えられる。

対象の基本属性別にみた妊娠・出産・産後・育児各期の意識では、30歳以上群で、「年齢（若年・高年）」「四肢のしびれ」、30歳未満群で「妊娠線」「体位・動作」「授乳方法」「お風呂の入れ方」など初産婦に不安が有意に多かった。妊娠中・出産後の別では、妊娠中群で「年齢（若年・高年）」、出産後群で「お産の始まり（産徴・陣痛の始まり）」「分娩監視装置」「傷（会陰の痛み）」などの不安が有意に多かった。出産経験別で

は、経産婦が「上の子どもの関わり」をあげ、初産婦が、「定期健康診査」「乳房ケア」「運動（妊婦体操・ヨガ・水泳など）」「嗜好品（タバコ・アルコールなど）」などの不安が有意に多かった。

今後は、今回妊・産・褥婦の妊娠・出産・育児に関して気になること、困ったことの基礎データが明らかになったので、これらの結果を基に、医療従事者が職種や経験年数の壁を超えて少しでも同一の見解のもと業務にあたることのできるための教材開発をしていきたい。

V. お わ り に

今回の調査結果を踏まえ、妊産婦本人や家族が、医療専門職と同一の認識のもと妊娠、出産、育児に関する医学的な所見やケアのポイント等を共有でき、そして、母親の疾病の予防・満足・育児に対する自信につ

ながり、さらに、母親と医療従事者が職種や経験年数の壁を超えて業務にあたれ、お互いの立場の力を発揮できる教材を作成していきたいと思う。

引 用 文 献

- 1) 厚生労働省：平成20年人口動態統計の年間推計：
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei08/index.html>
- 2) 中林正雄：助産師外来のあり方と意義，母子保健情報，第58号：2008：pp.30-32.
- 3) 堀内成子：新たな家族の誕生を支えるしくみ—助産師の最量権拡大の提言—，保健の科学，50(10)：2008：pp.663-670.
- 4) 宮里和子：行政と大学が協働する助産師活動—武蔵野大学附属産後センター桜新町の助産師活動—，保健の科学，50(10)：2008：pp.685-689.

